

機動部隊旗艦「大和」 3

珊瑚海再戦

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 佐藤道明

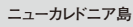
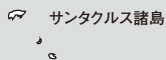
地図・図版 安達裕章

編集協力 らいとすたつふ

目次

第一章	「空の要塞」猛然	9
第二章	二つの鉾先 ほこさき	35
第三章	東の大河、西の猛禽 もうきん	71
第四章	因縁 いんねん の海	97
第五章	死闘ポート・モレスビー	155
第六章	広がる波紋	205

ソロモン諸島

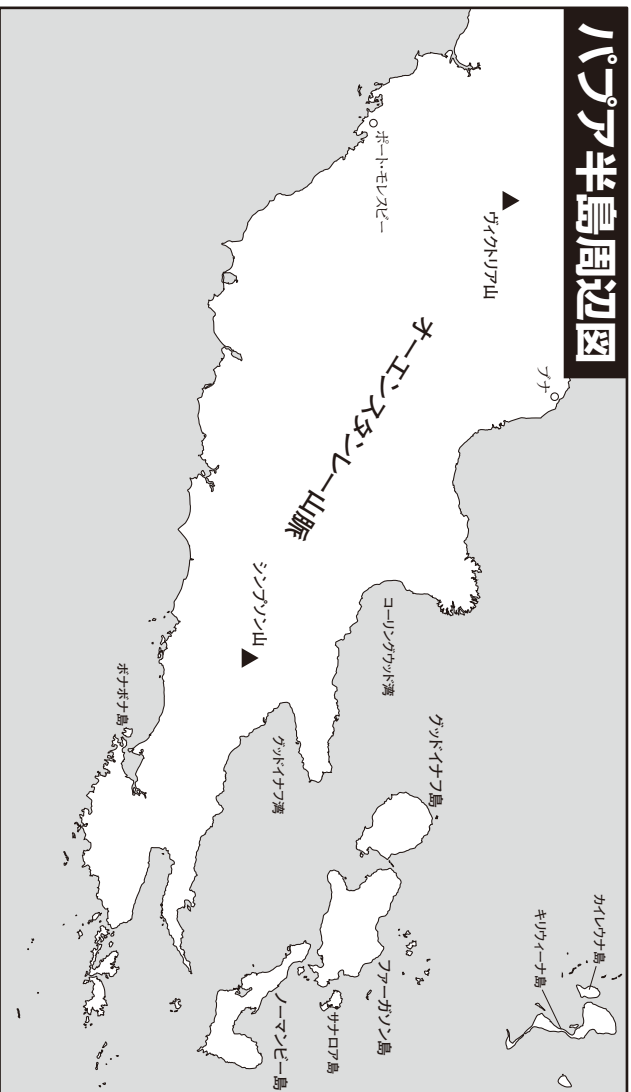


ニューヘブリデス諸島

ソロモン諸島周辺図



パピア半島周辺図





機動部隊旗艦「大和」 3

珊瑚海再戦

第一章 「空の要塞」 猛然

1

敵機は、ラバウルの西南西から侵入して来た。

ニューブリテン島の上空を横断する格好だ。

日本軍が島の南岸に設けている監視所の存在など、
歯牙にもかけていないような振る舞いだった。

「七〇機から八〇機といったところか」

第二六航空戦隊隷下の第六航空隊で、第三中隊長
を務める三倉哲雄大尉は、敵の数を見積もった。

敵は、ボーイングB17 フライイング・フォートレ
ス。二十数機から成る梯団が三隊だ。

これまでも、ラバウル上空にB17が飛来したこ
とはあるが、いずれも偵察を主目的としたものであ
り、多い場合でも六機が上限だった。

高度も八〇〇メートル以上であり、零戦がその
高度に到達する前に逃げられてしまうことがほとん
どだった。

だが今回は、七〇機から八〇機が五〇〇メート
ルの中高度域から来襲した。

明らかに、ラバウルへの爆撃を狙っているのだ。

邀撃に上がった零戦は四五機。

劣勢だが、これまでの消耗に補給や増援が追いつ
いていないため、この機数が精一杯なのだ。

飛行隊長山里輝文少佐の零戦がバンクし、突撃の
合図を送った。

六空の零戦が、各中隊毎に大きく分かれた。

三倉は、左の水平旋回をかけた。ちらと後方を見
やり、中隊の八機が続いていることを確認した。

敵の先頭梯団には、第一、第二中隊が向かってい
る。第三中隊は第二梯団を叩くのだ。

右前方から、目標が近づいて来る。

こちらの動きが目に入っていないはずはないが、
針路にも、速度にも変化はない。

二十数機のB17による緊密な編隊形は、「要塞」
よりも「城塞」と呼ぶに相応しい。

「行くぞ！」

三倉は一声叫^{さけ}んで、自身に気合いを入れた。ばらばらにかかったのでは、B 17は墜^おとせない。一個小隊三機で、敵一機を狙うのだ。

第二梯団のうち、向かって最も左に位置する機体に狙いを定め、エンジン・スロットルを開く。中島「栄」一二型エンジンが猛^{たけ}々しい咆哮^{ほうこう}を上げ、零戦の機体が加速される。

先に射撃を開始したのはB 17だ。

機首と胴体上面、右側面、下面に発射炎^{ひらめ}が閃^{ひらめ}き、青白^{せいこく}い火箭^{かせん}が噴^ふき延びる。

曳^{えい}痕^{こん}の大きさから見て、一二・七ミリ機銃——グラマンF 4F、ワイルドキャット、やカーチスP 40、ウオーホーク^ウが装備する火器と同じようだ。

開戦後間もない頃、フィリピンに展開していたB 17の防御火器は七・六二ミリ機銃だったというから、米軍はB 17の兵装を強化したのかもしれない。

胴体の複数箇所から、一斉に射弾を放^{はな}つ様^{さま}は、戦

闘機以上の凄^{すご}みを感じさせる。

三倉は、被弾を恐れず突進する。敵編隊との距離が、急速に詰まる。

巨大な壁が迫^はつて来るようだ。零戦の華奢^{きゃしゃ}な機体などは、撥^はね飛ばされてしまいそうな気がする。

照準器^{しょうしゅん}の白い環^わが、B 17を捉^{とら}えた。緑の密林迷彩を施^{こう}された機体が膨^{ふく}れ上がった。

頃^{ころ}合いよし、と見て、三倉は発射把柄^{はへ}を握^{にぎ}った。両翼^{りょうえん}の前縁^{ぜんえん}に発射炎が閃^{ひらめ}き、二〇ミリ弾の太い火箭が噴^ふき延びた。

射撃教範^{きやうはん}では、機首の七・七ミリ機銃によって弾道を確認した後に二〇ミリ機銃を発射すると定められているが、相手は零戦の何倍もある巨人機だ。最初から二〇ミリ機銃を発射しても、当たるはずだとの確信があつた。

B 17のコクピットから右主翼の付け根にかけて、真^まつ赤な曳^{えい}痕^{こん}が突^つき刺^ささる。

三倉は操縦桿^{そうじゅうかん}を左に大きく倒し、敵機から離脱

する。射撃から離脱までの時間を最短にするのが、生き延びるためのコツだ。

ちらと後方を見やると、新井四郎一等飛行兵曹の二番機、加瀬保二等飛行兵曹の三番機がB17に銃撃を浴びせる様が見える。

三機の零戦で、多数の二〇ミリ弾を叩き込んだのだ。すぐに火を噴き、墜落するかと期待するが、火災は起こらない。

呆れるほど火を噴きにくく、頑丈な機体だ。

三倉は新井機、加瀬機に合図を送り、敵機の前方に占位した。

装甲の厚いB17には、後方からの攻撃は効果が小さい。危険は大きい、正面攻撃を狙うのだ。

エンジン・スロットルをフルに開く。零戦が加速され、B17群の正面から突進する。

敵機の機首と胴体上下面に閃光が走り、無数の曳痕が殺到する。

機体を左右に振って、回避したい衝動に駆られる

が、三倉は敢えて直進する。

肉を切らせて骨を断つ構えだ。相打ち覚悟でなければ、「空の要塞」は墜とせない。

照準器の白い環が、再び目標を捉える。

相対速度は、時速九〇〇キロを超えていたであろう。B17の巨体が、凄まじい勢いで膨れ上がる。

三倉は、発射把柄を握る手に力を込めた。

再び両翼の前縁に閃光が走り、二〇ミリ弾の火箭が噴き延びた。

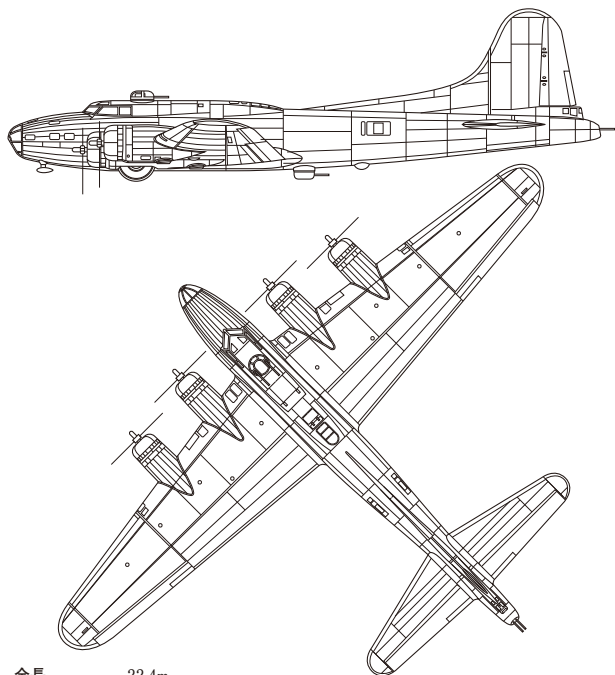
真つ赤な拳を思わせる曳痕が、B17の機首と左主翼に突き刺さる。

三倉は操縦桿を左に倒し、左フットバーを軽く踏んだ。

零戦が横転し、左主翼の先端を下にして降下に入った。

胴体下面の機銃座が撃ったのだろう、風防の左右を青白い曳痕が追い抜く。二、三発、主翼や胴体に命中したのか、不気味な打撃音が届く。

アメリカ陸軍 B17E 重爆撃機



全長	22.4m
翼幅	31.6m
全備重量	27,216kg
発動機	ライト サイクロン R-1820-65 1,200馬力×4
最大速度	510km/時
兵装	12.7mm連装機銃×3 (胴体上部旋回、胴体下部旋回、尾部旋回) 12.7mm単装機銃×3 (機首、胴体両側面) 爆弾 5,440kg (最大)
乗員数	8~10名

アメリカ陸軍が運用する重爆撃機。大きな爆弾搭載量、長大な航続性能に加え、厚い装甲と強力な防御火器、排気タービン過給機による高高度性能など、これまでの爆撃機とは一線を画す高性能機として知られる。

本型は、さらに防御火器を強化したタイプで、太平洋戦線での主力になりつつある。

一〇〇メートルほど降下したところで、機体を水平に戻す。新井機、加瀬機が追隨する。

頭上では、B 17が黒煙を引きずっている。速力が落ち、編隊から落伍しかかっている。

第一小隊が狙った機体だけではない。

他にも一機のB 17が激しく黒煙を噴出し、高度を落としている。

ニューブリテン島の密林からは、黒煙が立ち上っている。第一、第二中隊が、先頭梯団のB 17を何機か墜としたのだろう。

B 17群は進撃を止めない。高空の大気を轟々と震わせながら、ラバウルに向かっていく。

三倉は、残弾計を確認した。

二〇ミリ弾の残りは三三発。あと二度は攻撃できる。

新井機、加瀬機を従え、B 17群の前方に回り込む。今度は、敵編隊の正面上方から突進する。

胴体上面の機銃座が火を噴き、何条もの火箭が突

き上がって来る。

三倉は構うことなく突進し、二〇ミリ機銃を発射した。

太い火箭が噴き延び、真っ赤な曳痕が機首から胴体上面にかけて突き刺さる。旋回機銃座にも命中したのか、胴体上面からの火箭が消える。

離脱する直前、三倉はB 17が大きく機首を下けている様を見た。

炎も煙も噴き出してはいないが、墜落しかかっている。

三倉の二〇ミリ弾はコクピットを直撃し、正副の操縦員を殺傷したのかもしれない。

「これで二機」

呟きながら、敵機の射程圏外に離脱する。

残弾は一七発。あと一度は攻撃をかけられると思つたが――。

「間に合わぬか！」

三倉は舌打ちした。

B 17 群の前方で次々と爆発が起こり、黒煙が漂い流れている。

その真下に、ラバウルの港や在泊艦船が見える。

六空が攻撃を繰り返す間に、空中の戦場はラバウル港の間に移動していたのだ。

これ以上 B 17 に食いがれば、味方の対空砲火に巻き込まれ、撃墜されることになりかねない。

一旦、B 17 群と距離を置いた。

数秒後、敵編隊の上空で爆発が起きた。

無数の火の粉が傘のような形に飛び散り、B 17 の真上から降り注いだ。

一機が燃料タンクを損傷したのか、左主翼全体が火焰に包まれ、別の一機が右主翼のエンジン二基から黒煙を噴き出す。

「『比叡』か！」

三倉は叫び声を上げた。

八月二一日のガダルカナル沖海戦で大きな損傷を受けた後、ラバウルに留め置かれていた第三艦隊の

戦艦「比叡」が、三式弾を放ったのだ。

「比叡」の対空砲火は、三式弾だけに留まらない。

艦の左舷側を真っ赤に染め、どの在泊艦船よりも激しい対空砲火を B 17 に浴びせている。

先頭梯団の一機が被弾したのか、左の主翼から黒煙を噴き出してよろめく。

続いて第二梯団の一機が、左主翼の一番エンジンから発火し、高度を下げ始める。

姉妹艦「霧島」と共に真珠湾攻撃に参加して以来、機動部隊の一艦として、空母を守って来た艦だ。

その戦艦が、「空の要塞」を相手に一歩も退かず、対空砲火の猛射を浴びせている。

また一機、B 17 がよろめく。

翼内の燃料タンクを貫かれたのか、白煙を引きずりながら、高度を下げてゆく。

だが「比叡」の奮闘は、長くは続かなかった。

B 17 の胴体下から、黒い塊が投下される。

五〇〇キロクラスと思われる爆弾が大気を裂いて、

ラバウル港へ——「比叡」の頭上へと落下してゆく。港内の海面で、続けざまに爆発が起きた。大量の飛沫が奔騰し、「比叡」の姿を隠した。

一つ、二つ、三つと、直撃弾炸裂の閃光が、白い朦朧の中に走る。

それでも、「比叡」の対空射撃は止まなかった。

立ちこめる朦朧の中、数秒置きに閃く発射炎が見て取れた。

B 17の投弾が終わると同時に、「比叡」の対空射撃も止んだ。

露わになった「比叡」の姿を見て、三倉は息を呑んだ。

艦橋は半ば崩れ落ち、上甲板の板材はほとんどが吹き飛ばされている。最後まで砲撃を続けたことが、信じられないほどだ。

艦は右舷側に傾斜した状態で動かなくなっており、上甲板を海水が洗っている。

ガダルカナル沖の夜戦で、既に大きく傷つけられ

ていた「比叡」は、新たな打撃に耐えられず、ラバウル港内に着底したのだ。

三五・六センチ主砲のうち、前部の四門は目一杯仰角をかけている。

「比叡」が最後まで戦った事実を、無言のうちに物語っているかのようなだった。

三倉は「比叡」に敬礼を送り、六空の基地がある西飛行場に機首を向けた。

B 17の空襲が、一度だけで終わると決まったわけではない。

燃料、弾薬を補給し、再度の来襲に備えるのだ。

2

同じ頃、ガダルカナル島の北岸でも、空襲警報が鳴り響いていた。

同島は、八月二六日に日本陸軍川口支隊が占領した後、海軍の第一〇、一一、一三設営隊が上陸し、

飛行場の建設作業にかかっている。

米軍はガダルカナルからの撤退に当たり、飛行場を徹底的に破壊し、滑走路には多数の孔を穿^{あな}つていった。

設営隊は、昼夜兼行^{ちゆうや}で滑走路の修復を進め、八月二八日までは、長さ一〇〇〇メートル、幅六〇メートル分の整地を完了させた。

指揮所、燃料庫、部品倉庫、宿舎等の付帯設備はまだ建設されておらず、航空部隊が進出できる状況ではなかったが、不時着用の飛行場としてなら利用できる程度には復旧^{ふくじゅう}させたのだ。

ルンガの海岸でも、水上機基地の整備が進められている。

こちらは飛行場よりも順調であり、燃料や交換用部品を搬入すれば、水上機の進出が可能になるところまでこぎつけていた。

そのような状況下、「敵機来襲」を告げるサイレンが鳴り響いたのだ。

川口支隊の将兵も、海軍設営隊の隊員や軍属の労務者も、束の間^{つかの間}作業の手を止めた。

「敵機来襲！」

の叫び声^{こゑ}が、複数箇所^{ふくすう}で上がり、飛行場も、海岸も騒然^{さうぜん}となった。

「作業中止！ 避退^{ひたい}しろ！」

「密林に隠れろ。急げ！」

各隊の指揮官が、声を囁^{ささ}らして叫ぶ。

ほとんどの者が密林に向かつて走り、できる限り防御陣地や飛行場から遠ざかる^{とほざかる}とする。

急^{いそ}ごしらえの高射砲陣地に取り付く兵もいる。

上陸してからまだ二日であり、陣地の構築が充分とは言えない。高射砲の数も、八門と少ない。

それでも、兵は決死の形相^{ぎようそう}で旋回ハンドルを回して、八八式七センチ高射砲の砲身に最大仰角をかけ、上空を睨^{にら}み据えた。

海岸や飛行場の狂騒^{きやうそう}を押し潰^{つぶ}さんとするように、爆音が島の内陸から聞こえ始める。

敵機がソロモン諸島の南側から来襲したことを物語っていた。

「来た！」

高射砲陣地で、叫び声が上がった。

地上から見上げた限りでは、トンボほどの大きさにしか見えない。

それでも、太く、ごつい胴体と幅広く、長い主翼、四基を装備するエンジンを見ただけで、相当な大きさを持つことが実感される。

マレー半島やビルマで活躍した陸軍航空隊の九七式重爆撃機や、マレー沖海戦やフィリピン攻撃で大功を立てた海軍航空隊の九六式陸上攻撃機、一式陸上攻撃機より、一回りは大きそうだ。

「空の要塞」ことB 17が、日本軍の占領下に入って間もないガダルカナル島の上空に姿を現していた。

「撃て！」

高射砲陣地で、号令がかけられた。

八門の砲口に発射炎が閃き、修復途中の飛行場に

砲声とどろが轟いた。

高射砲は、矢継ぎ早に射弾やづを放つ。

最初の射弾が爆発する前に二発目が発射され、三発目、四発目が続く。

装填手そうてんしゅは顔を真っ赤に染めて、三秒から四秒置きに、九キロ近い重量を持つ九〇式高射尖銳弾せんえいを装填し、射手はB 17の未来位置を狙って引き金を引く。

重々しい砲声おもおもが殷々いんいんと轟き、将兵が撤退している密林の中にまで伝わる。

上空を行くB 17の前後に、左右に、爆発光が閃き、黒煙が漂う。

八八式七センチ高射砲の有効射高は七〇〇メートル。

三〇〇〇メートル前後の高度を飛行するB 17には、余裕で砲弾を届かせることができる。

砲員の誰もが、二〇メートルの危害直径を持つ七センチ砲弾が、片端かたはしから「空の要塞」を墜とす光景を期待する。

だが、B 17は火を噴かない。

爆風に煽られたようによるめく機体はあるが、落伍には至らない。

「畜生、墜ちろ！」

ある高射砲の射手は、罵声を上げながら引き金を引いた。

一発発射する度に、「墜ちろ！」の叫び声を叩き付けた。声そのものを砲弾にして、B 17に叩き付けようとしているようだった。

墜落するB 17は、一機もない。

針路、速度共に変わることなく、飛行場に向かって直進して来る。

頭上を圧する爆音は、地上の将兵にとり、嘲笑のように感じられた。

B 17群が、飛行場の上空を通過した。大気を裂く鋭い音と共に、多数の黒い塊が降って来た。

地上の数十箇所で爆発が起こり、大量の土砂が逆円錐形の爆風に乗って、空中高く舞い上がった。

海軍設営隊が熱帯圏の暑熱の中、蚊やブヨに悩まされながら整地した滑走路の上に、多数の爆弾が落下し、新たな破孔を穿ってゆく。

水上機基地にも投弾され、完成したばかりの栈橋が爆砕される。

八箇所の高射砲陣地にも、敵弾が落下する。

直撃弾を受けた陣地は、閃光と共に砲身や砲架、砲員が消失し、至近弾を受けた陣地は横殴りの爆風を受け、砲身が横転する。

高速で飛散する弾片は、射手であれ、装填手であれ、容赦なく肉体を切り裂き、兵士は絶叫を上げて倒れ伏す。

川口支隊の将兵や設営部隊の隊員が隠れた密林の上からも、敵弾が落下する。

ほとんどは地上で爆発し、落ち葉や下生えを土砂と共に巻き上げるが、密生する樹木に遮られて空中で爆発するものもある。

鋭い弾片と共に、爆砕された幹や吹き飛ばされた

枝が兵士や労務者の頭上から降り注ぎ、顔といわず、四肢といわず、突き刺さる。

最前線のガダルカナルに、安全な場所はない。

その冷厳な事実を、誰もが思い知らされていた。

投弾を終えたB17が飛び去った後、ガダルカナルの飛行場も、水上機基地も、占領以前の状態に戻っていた。

設営隊が修復した滑走路には多数の爆弾孔が穿たれ、水上機基地の栈橋や係留索は、ことごとく爆砕されている。

川口支隊の将兵も、設営隊の隊員や軍属も、茫然とたたずみ、爆撃の跡を見つめているだけだった。

3

「右三〇度に島影」

駆逐艦「夕風」の艦橋に、見張員が報告を上げた。

「コロバンガラ島です」

「ニュージョージア島の北西にある島だな」

航海長古賀泰次予備中尉の言葉を受け、「夕風」

駆逐艦長岡田静一大尉は、頭の中に現海域の地図を思い浮かべた。

「夕風」は「カー四船団」と名付けられた輸送船団の護衛として、ガダルカナル島に向かっている。

八月二八日の空襲で、大きな被害を受けた守備隊に、食糧、医薬品、弾薬等の補給物資を運ぶのだ。

船団は輸送船六隻から成り、三隻ずつの複縦陣を組んでいる。

護衛には「夕風」の他、第三〇駆逐隊の「弥生」

「卯月」が付いており、三隻で傘型の陣形を組んで、船団の前方を守っていた。

「本艦には、因縁のある場所ですね」

「因縁の地は、ニュージョージアの反対側だな」

古賀の言葉を受け、岡田は小さく笑った。

「夕風」は六月三〇日のニュージョージア沖海戦で、軽巡洋艦「龍田」、第二九駆逐隊の僚艦「朝風」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。